



ト上にアップロードすること、という2つの学習内容に必然性をもたせることが可能となった (Fig. 1 参照)。

### 3 実施目的

各教科の指導目標を以下に示す。

#### (1) 総合国語Ⅱ

- ・詩を読んで、情景、心情などを的確にとらえ、表現を味わう (読む)
- ・読書に親しみ自己を向上させ、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う (読む)
- ・詩から読み取ったイメージを、自分の言葉で的確に表現し、伝える力を高める (話す・聞く)

#### (2) 情報処理

- ・字幕を付与した動画に必要な構成要素を把握し操作できる (知識・理解)
- ・動画編集ソフトウェアの基本操作を字幕を付与した動画編集に適用できる (技能)
- ・動画の構成要素を最適化する考え方を実際の編集に適用できる (思考・判断・表現)

#### (3) 情報コンテンツ実習

- ・レスポンスウェブデザインに基づくウェブページの編集ができる (技能)
- ・ウェブページの構成要素 (文字列、画像、動画) のタグを識別できる (知識・理解)

### 4 生徒の実態

平成X年度入学生7名、平成Y年度入学生6名を対象に実施した。ここでは、平成Y年度の6名を中心に報告する。6名中、1名は普段から音声日本語よりも手話を主たる発信のコミュニケーション手段としているが、残り5名は原則的に音声併用の手話をを用いている。

### 5 総合国語Ⅱの指導 [第1次]

#### (1) 詩の選択から暗唱

平成X年は、授業者が用意した詩集2冊を課題とし、その中から選ばせた。平成Y年はB社から寄贈を受け、233冊の詩集から生徒が自由に詩を選ぶことのできる環境が整った。

詩集の冊数が増えたことで生徒が混乱するのではないかと危惧したが、2時間の授業時間で候補となる作品を選ぶことができた。「本が多くて選ぶのが大変だった」と悩む生徒が2名いたが、その日のノートからは前向きな姿勢がうかがえた。記載内容は以下の通りである。

ポエムは本がたくさんあって選ぶのがすごく大変でした。自分が好きな手話で表現しやすいものを考えながら選んでいきたいと思います。

ポエムを選ぶ作業は大変でした。でも、様々なポエムがあり、面白かったです。

#### (2) 手話への翻訳と撮影

初めに暗唱テストを実施した。B社から、「作家の方が選んだ言葉を変えないでほしい」という要望を受けていることを伝え、1文字も間違えずに唱えることができるまで繰り返し練習するよう指示した。

手話の翻訳は、原則生徒自身の解釈を尊重している。授業者からは、以下の条件を提示した。

- ・日本語を手話に置き換えるのではなく、日本語から一旦頭の中で映像化し、それを手話に置き換えて表現を考えること。
- ・サイレント作品として発表するため、音声は用いないが、必要な口形は明確に表現すること。
- ・「手の形」「位置」「動き」「大きさ」「速さ」「視線」「体の向き」を意識し、詩の世界をできる限り視覚的に表現すること。

撮影は、2名1組で行った。初めのうちは、日本語にとらわれて的確な表現を考え出せない生徒もいたが、授業者やペアを組んでいる友だちとのやりとりを通して、少しずつ変容が見られた。手話に翻訳するという課題によって、次のような場面が観察された。

##### ① 【例1】語彙に関する気づき

Fig. 2の詩「坂」を選んだ生徒Aは、最初の訳で傍線部の部分を「真実・本当」+「坂」という手話で表現していた。「まさか、の意味を踏まえて手話表現を考えてね。」と言葉がけをすると、辞書を引いて意味を確認し、「意外」という手話の動きに驚いた表情をつけて表現するようになった。

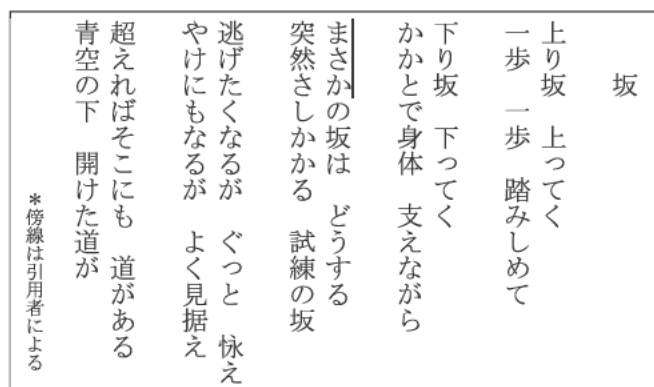


Fig. 2 「坂」(林 2013)

## ② 【例2】解釈に関する気づき

Fig. 3 の詩「海の虹」に取り組んだ生徒 B (以下 SB) は、手話をするとき第一連と第二連で立つ位置を変えた方がよいのではないかと提案してきた。授業者 T (以下 T) とペアを組んだ生徒 C (以下 SC) とのやりとりの中で、詩の解釈を修正することができた。以下に生徒とのやりとりを示す。

SB: 場所を変えた方がいいのかな。海にいるときと、陸にいるときと場所が違うから…。

T: これは、居るのはどこか1点で、見ているものが違うんじゃない?

SC: あ〜あ。(手を上下に動かして)、はじめは(上の方に手を動かして) こっちを見て、次は下を見て。

T: そう。どっちも空間を示しているよね。(一連目は)手前の舟から上がって鳥。二連目は、手前の波から遠くの島。

SB: 手前か。手前から奥にいく感じ。ああ、そっか。

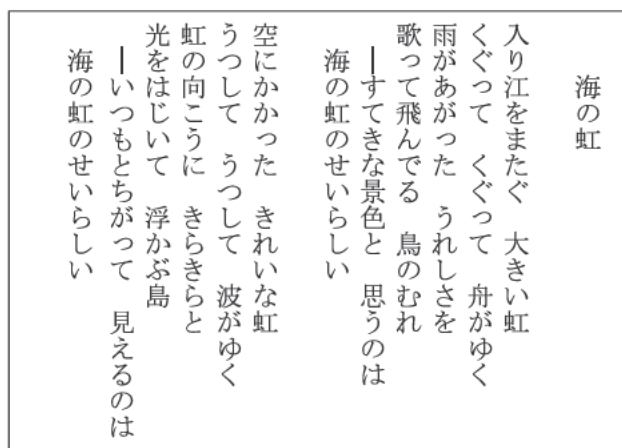


Fig. 3 「虹の海」(宮中 2009)

## 6 情報処理・情報コンテンツ実習の指導[第2次]

生徒には、以下の条件で取り組むよう指示した。

- ・字幕を付与すること
- ・動画の最初にタイトルを表示させること
- ・エンドロールを入れること
- ・作品の演出としてトランジションなどの効果を検討すること
- ・字幕の表示位置、表示量、表示時間、文字色などを閲覧者の立場から検討すること
- ・手話表示と字幕を連動させるなど、閲覧者が分かりやすくなる工夫を検討すること

生徒は、手話に合わせて字幕が提示されるよう調整したり、背景を踏まえて色を調整したり、見る人が手話と字幕から同時に情報を取り入れられるよう意識して進めていた。

使用したソフトウェアは以下の通りである。

- ・Adobe Premiere Elements 2018 (動画編集用)
- ・Microsoft Power Point 2013 (画像作成用)
- ・FFFTP (データアップロード用)
- ・Terapad (テキストエディタ: まとめサイト作成用)

完成後は、全員の作品をDVDにして国語担当の教員に届け、B社には作品が完成したことをメールで生徒自身から報告させた。本来であれば、代表者1名が報告することではあるが、B社の協力を得て、全員が報告のメールを送信した。実際に面識のない企業の方に対してメールを送るという学習活動は、適度な緊張感を生徒に与え、今まで学習したことを活かして文章を考える良い機会になった。

## 7 総合国語Ⅱの指導 [第3次]

B社の方と、来年度本単元を学習する1年生を招いて、鑑賞会を行った。「詩を選んだ理由」と「見どころ」を説明したあと作品を再生し、質問したりコメントを書いたりする時間を設けた。

最後にB社の方から以下のような講評をいただいた。

- ・手話を知らない立場で見ていると、字幕が詩の言葉と異なる順番で色が変わることに違和感をもったが、手話と日本語の文法が違うという説明を受けて納得した。手話を知らない自分でも楽しめ



る作品になった。

- ・作家の方は、「どこで改行するのか」ということも1つ1つ吟味して作品を書いている。字幕では、詩の視覚的な形が見えなくなってしまうというのが気になった。手話ポエムの最後かどこかで、詩を本の掲載されている通りの形で提示する映像があると良くなるのではないかなと思う。

その日の生徒のノートには、次のような振り返りが見られた。

他の人の作品も見て、素敵な作品もいろいろあるので、もっと詩の本を借りたいと思いました。

来年の後輩たちに続くような作品をみんなで作ることができて良かったです。文化祭やHPに載ることで、手話ポエムが広がっていったらいいなと思いました。

完成した映像は、生徒の承諾を得てWEB上にアップロードし、文化祭で展示した。(Fig. 4 参照)



Fig. 4 文化祭展示の様子

## 8 成果と課題

「魅力的な作品を完成させたい」という思いから、自分の学んだ知識や技能を活かし、授業者や友だちの意見を取り入れて主体的に取り組む様子が観察された。やりとりの中で、詩に関する文学を語る用語を授業者が使い、次の場面で生徒が活用する場面も見られた。手話で表現するという課題により、「情景・心情を的確にとらえ」たり、その解釈を「的確に表現し、伝える」ことにも迫ることができた。

教科連携により、生徒の意欲を引き出しつつ互いの教科の指導目標を達成させる試みは、これまでも積み重ねてきた(藤本・内野 2017)。今回、そこに

企業とのつながりを加えたことによって、授業担当者が生徒にとって評価者の立場ではなく伴奏者として共に課題に取り組む立場に立てたことに意義がある。生徒と授業者のやりとりが対等になることで、授業者からのアドバイスを受け身的に聞くのではなく、本当にプロジェクトを成功させるために有効かどうか、生徒が主体的に考えるようになった。

また、生徒の振り返りから本実践が詩に対する興味・関心に一時的につながったことが読み取れる。しかし、生涯を通じる読書生活にまで高めることができたかという観点からは疑問が残る。生徒の読書生活に結びつく指導のあり方をさらに検討していきたい。

## 9 まとめと今後の展望

現在、生徒が制作した映像は、「生徒作品」として実施校のHPに掲載し、B社のHPにもリンクされている。今後は、特別支援学校生徒の「生徒作品」としてではなく、商品価値が認められる映像データに高めていくことを考えていきたい。

2年間という限られた教育課程の中で、専攻科の国語科として何をどう育むのか、学科に携わる教員が互いに連携してカリキュラム・マネジメントを推進していくことが必要だと考えている。

言葉そのものを学習対象として言語能力を育成していくための国語の指導のあり方を、今後も追究していきたい。

### 〔謝辞〕

本研究の実施に当たっては、株式会社銀の鈴社の皆様に、多大なるご支援とご協力を賜りました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

### 〔参考文献・引用文献〕

- 宮中雲子(2009)「手と手のうた(ジュニアポエム双書199)」銀の鈴社、12-13。  
 林佐知子(2013)「この空につながる(ジュニアポエム双書230)」銀の鈴社、60-61。  
 藤本裕美子・内野智仁(2017)教科連携によるプレゼンテーションの指導実践― 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要、40、79-84。